

## 研究ノート

日本橋三越本店における  
パイプオルガン導入についてIntroduction of a Pipe Organ into Nihonbashi Mitsukoshi Department Store  
UCHIDA Junko

内田順子

## はじめに

日本橋三越本店には、中央ホール2階バルコニーにパイプオルガン（以下、オルガンと記す）が設置されている。このオルガンは、1929（昭和4）年、アメリカのルードルフ・ウーリッツァー社（THE RUDOLPH WURLITZER Co.）によって製作されたもので、1930（昭和5）年5月に三越の7階ギャラリーに設置され、1935（昭和10）年10月に中央ホール2階バルコニーに設置されて現在に至る（写真1）。

なぜ百貨店にオルガンがあるのだろうか。一般にパイプオルガンと言えば、キリスト教の教会にあるものが連想されるであろうから、百貨店にあることを不思議に感じる人も多いのではないだろうか。

三越に設置されているのは「シアターオルガン」に分類されるオルガンであり、キリスト教のミサや礼拝で演奏されるオルガンとは異なる。シアターオルガンは、アメリカ、イギリスを中心に、無声映画の伴奏用に劇場に設置されたもので、20世紀はじめのおよそ30年間がその全盛期であっ

写真1 日本橋三越本店中央ホールのオルガン  
（2014年9月撮影）

た。オルガン演奏の目的、オルガンの外観、備えられている音色、パイプに空気を送る仕組みなど、キリスト教会のためのオルガンとは大きく異なっている。

三越百貨店といえば、百貨店が発足した1905（明治38）年、休憩室にピアノとヴァイオリンを設置して、翌年から店内で同楽器による演奏会を開催したり、1909（明治42）年には三越少年音楽隊を結成して音楽活動を展開したりするなど、日本における西洋音楽の受容史のなかで重要な役割を果たしてきたことは、先行研究においてすでに明らかにされている〔玉川 1997,2007〕〔三枝 2004〕。

これらの研究は、三越の音楽活動を、日本の交響楽運動との関わりや、消費社会形成期における西洋音楽の普及という観点から論じたもので、三越にオルガンが設置される1930（昭和5）年以前を対象としており、オルガンを対象に、または、オルガン設置後の三越の音楽活動について論じた研究はまだない。

一方、日本におけるオルガン受容史の研究〔吉田他編1985, 1992〕〔赤井1995〕は、キリスト教会のオルガンを中心になされておられ、管見の限り、この分野においても、三越のオルガンを対象にしたまとまった研究成果は見られない。

三越のオルガンについての研究がほぼ皆無であるのは、断片的な記録しか残っていないということが要因のひとつではないだろうか。関連資料の丹念な収集が必要である状況ではあるが、現段階で把握できた本オルガンの歴史的経緯から、本資料についての研究は、将来的には、戦前における日本のオルガン音楽の受容の一側面や、戦前・戦後の三越のイメージ戦略と音楽活動との関係についての研究などに貢献できるのではないかと考え、本稿では中間報告としてまとめることを目的とする。

なお、本稿で記述する三越のオルガンの歴史的経緯については、全体の流れが理解しやすいよう、概略を表1にまとめたので、適宜参照されたい。

表1 三越オルガン略年表

年	出来事
1914（大正3）年	1階から5階までの吹き抜けホールを有する地上6階、地下1階の鉄筋コンクリートの新館完成。
1927（昭和2）年	関東大震災後の修繕工事完了。1階から5階までの吹き抜けホールをつぶして床を貼り、6、7階を増築して床面積を増大。
1929（昭和4）年	欧米視察中の三越専務取締役・小田久太郎が、アメリカ・フィラデルフィアにあるジョン・ワナメーカー百貨店を訪問し、店内に設置されているシアターオルガンに感動して三越本店にも備え付けることを考案。ニューヨークのウーリッツァー社ショールームで同社製のオルガンを購入。
1930（昭和5）年	三越7階ギャラリーにオルガン設置。5月28、29日に初公開演奏。 6月9日、木岡英三郎による演奏がJOAK（現在のNHK）ラジオで中継。 11月15日、連続10回の「大パイプオルガン演奏会」シリーズの第1回目「大バツハ代表的名作演奏の夕」開催。オルガン演奏は木岡英三郎。
1931（昭和6）年	5月30日、「大パイプオルガン演奏会」シリーズ「近代オルガン交響曲の夕」開催。オルガン演奏は木岡英三郎。
1935（昭和10）年	南側敷地に増築され、1階から6階までの吹き抜けホールが復活。吹き抜けホール2階バルコニーにオルガン設置。 12月25日、木岡英三郎による演奏がラジオ中継。
1936（昭和11）年	木岡以外のオルガニストの名前が三越の新聞広告やラジオ番組紹介頁に見られるようになる。松本幹・赤間尚義など。
1937（昭和12）年	大中寅二、松浦千恵子、杉井幸一、大中寅二などの名前が三越オルガンの演奏者として登場。
1938（昭和13）年	奥田耕天による三越オルガン独奏のラジオ中継。
1939（昭和14）年	三越の従業員・邊見利雄が国産の「和曲ロール」の製作に成功。
1945（昭和20）年	11月12日、三越でおこなわれた宝くじの抽籤にオルガン伴奏がつく。
1946（昭和21）年	元ウーリッツァー社の技術者の指導によって修復され演奏再開。
1951（昭和26）年	専属奏者として松沢宏が入社。 12月24日、ラジオ東京（現在のTBSラジオ）が開局。翌25日、「三越玉手箱（三越提供）」という番組中の「歌うパイプオルガン」の時間帯に松沢のオルガン演奏放送。
1985（昭和60）年	松沢宏が退職。 ビクター・クラーク・セアルおよびフィリップ・ウィックストロームによる1年がかりの大規模な修復が実施される。同氏は以後20年間にわたり、三越オルガンの演奏を担う。
2007（平成19）年	8月から9月にかけて修復。
2008（平成20）年	中央区民有形文化財歴史資料に登録。

2014年現在 作成：内田順子

## 1. 日本橋三越本店中央ホールのオルガンの仕様

### 1-1. 概要

日本橋三越本店中央ホールのオルガンは、2008(平成20)年、中央区民有形文化財歴史資料に登録された。登録審査時の資料(中央区教育委員会所蔵、資料説明6頁と参考資料2頁から成る。以下、「登録審査資料」とする)によれば、本オルガンは、1929(昭和4)年、アメリカのルードルフ・ウーリッツァー社(THE RUDOLPH WURLITZER Co.)によって製作されたものである(製造番号2099, モデルR.20)。コンソール(演奏台)左右に設置されたパイプ室まで含めた間口は8.2メートルで、コンソールの法量は、幅154.5cm, 奥行84.0cm, 高さ126.5cmである。

写真1にあるように、コンソールはバルコニー中央に置かれ、その左右のカーテンの向こう側に、開閉可能な壁面に覆われたパイプ室があり、パイプはその中に収められている。教会のオルガンは、パイプの一部を見えるように配置するのに対し、アメリカ・イギリスのシアターオルガン製作会社は、パイプを観客から見えないように、調整可能なブラインドがついた箱の中に入れる[Meusy, 2002: 5]。

本オルガンは、3段の手鍵盤(5オクターブ、61鍵、C-c4)と32鍵のペダルを備えている(写真2)。手鍵盤は下から順に、Accompaniment, Great, Soloとなっている。

写真2 コンソール

シアターオルガンでは、小型のものを除き、コンソールは馬蹄型をしている場合が多い。この形は、シアターオルガン以前につくられた教会のオルガンにも見られるが(パリのサン・シュルピス教会のオルガンの例など)、これは、コンソールに設置されたすべての装置をオルガニストの近くに配置するための形である[Meusy 2002: 5]。三越のオルガンはそこまで大規模なオルガンではなく、コンソールは馬蹄型ではない。あとで参照するが、1930(昭和5)年に三越7階ギャラリーにオルガンを備え付けた時の三越の宣伝では、馬蹄型コンソールをもつオルガンの写真が用いられている(写真7)。

写真3 ストップ

シアターオルガンの外観上の特徴には、もうひとつ、ストップの形がある。ストップは、どのパイプに風を送るかを選ぶための装置、すなわち、音色を選ぶ装置である。シアターオルガン以前の教会のオルガンでは、ストップが棒状で、棒を引いたり入れたりする大きな動作を必要とし、その分、時間もかかるが、シアターオルガンのストップは「猫の舌」の

形をしており（写真3）、白はフルート系、黄色は弦楽器系、赤は管楽器系、黒は鍵盤の組み合わせを変えるなどの特別の操作というように機能が一目でわかるように工夫されており、オルガニストはこれを下げたり上げたりする小さな動作で迅速に音色を変えることができる [Meusy 2002: 5]。

シアターオルガンは、映画の中で演奏される音楽——ダンス、ジャズ、効果音など——の、しばしば速いリズムに合わせる必要があったため、パイプに送られる空気の圧力も、教会用のオルガンよりも高いなどの違いもある [Meusy 2002: 4-5]。

1932（昭和7）年に発行された資料によれば、三越のオルガンはストップ27列（ストップ数については記述がない）、パイプ数1640本となっている [多米 1932: 221]。パイプ数が現在のものよりかなり多いので、正しい数字であるかは今後の調査によるが、次節に述べる通り、このオルガンは戦後、複数回の修復がなされており、ストップとパイプの数は変化している。「登録審査資料」によれば、中央区民有形文化財登録時のストップ数は89個、パイプの数は852本となっている。

## 1-2. 修復

「登録審査資料」によって確認される修復は、1946（昭和21）年、1985（昭和60）年、2007（平成19）年の3回である。以下、修復の概要を「登録審査資料」によってまとめる。なお、「修復」という語は、「登録審査資料」で使用されているため本稿でもそのまま用いるが、オルガンをもとの状態に戻すだけでなく、新しい機能を加えるなどの改良も含んだ「修復」であることを申し添えておく。

第二次世界大戦中、パイプ室の装飾として利用されていた金属製のアンチモ材など、一部部材の戦時供出が余儀なくされたが、パイプを含めた本体の供出は免れた。戦後、進駐軍のオルガン愛好家バーノン・ブラウンが尽力し、元ウーリッツァー社の技術者の指導のもと修復され、1946（昭和21）年に演奏が再開された。

その後、しだいに故障が出て、音の出ない鍵盤が多数見られるようになったことから、1985（昭和60）年、アメリカのビクター・クラーク・セアルと、その友人でパイプオルガン技術者であるフィリップ・ウィックストロームによって、およそ1年間にわたって大規模な修復がなされた。音の出なくなっていた268本のパイプと185の送風装置、すべての手鍵盤が交換された。また、1930（昭和5）年の設置時に買い忘れたという太鼓・シンバル・タンバリン・チャイムなどの打楽器のほか、船の汽笛・鳥の囀りなど、新たに15種類の音が出る装置が追加された。コンソール部分の塗装を剥がして元の木目を表に出すなどの変更もなされた。

さらに2007（平成19）年8月から9月にかけては、錆や埃などのために音が出なくなってしまったパイプがいくつかあったことから「リニューアル工事」がおこなわれた（以上まで、「登録審査資料」による）。

表2は、1985（昭和60）年から1986（昭和61）年にかけてオルガン修復に携わり、その後、20年間にわたって、このオルガンの朝10時、昼12時、午後3時の演奏を担っていたビクター・クラーク・セアルの報告<sup>(1)</sup>により、音色の構成をまとめたものである。

表2において、\*を付したものは1986（昭和61）年に、+を付したものは2006（平成18）年に追加された音色である。1986（昭和61）年に加えられ打楽器系の音色は、おもに手鍵盤の左右に追加されたボタンと、足元に追加されたボタンで操作する（写真4.5）。これによって、演奏できる曲の幅が広がり、シアターオルガンとしての性格が補われたと見られる。

表2 三越オルガンの音色の構成

PEDAL	Tuba 16'	ACCOMPANIMENT	Contra Viol 16' (TC)	GREAT	Tuba 16'	SOLO	Tuba 16'
	Bass 16' (Diaphone)		Tuba 8'		Bass 16'		Brass Trumpet 8'
	Bourdon 16'		Open Diapason 8'		Tibia 16' (TC)		Tuba 8'
	Tuba 8'		Tibia 8'		Clarinet 16' (TC)		Open Diapason 8'
	Diapason 8'		Clarinet 8'		Oboe Horn 16' (TC)		Tibia 8'
	Tibia 8'		Oboe Horn 8'		Contra Viol 16' (TC)		Kinura 8'
	Clarinet 8'		Salicional 8'		Bourdon 16'		Oboe Horn 8'
	Cello 8'		Voix Celeste 8' (TC)		Brass Trumpet 8'		Clarinet 8'
	Flute 8'		Flute 8'		Tuba 8'		Salicional 8'
	Dulciana 8'		Vox Humana 8'		Open Diapason 8'		Flute 8'
	Acc to Ped		Dulciana 8'		Tibia 8'		Vox Humana 8'
	Gt. to Ped		Octave 4'		Kinura 8'		Octave 4'
	Solo to Ped		Piccolo 4' (Tibia)		Clarinet 8'		Flute 4'
	*Bass Drum		Salicet 4'		Oboe Horn 8'		Piccolo 4' (Tibia)
	*Rhythm Cymbal		Octave Celeste 4'		Salicional 8'		Salicet 4'
	*Woodblock		Vox Humana 4'		Voix Celeste 8' (TC)		Flute 4'
			Chrysoglott 49 bars		Flute 8'		Twelfth 2 2/3' (Flute)
			+Acc to Acc 4'		Vox Humana 8'		Piccolo 2' (Flute)
			Solo to Acc 16'		Dulciana 8'		Cathedral Chimes
			Solo to Acc 8'		Octave 4'		*Xylophone Tap 32 bars
			Solo to Acc 4'		Dulcet 4'		*Xylophone Roll
			*Snare Drum Tap		*Twelfth 2 2/3' (Tibia)		
			*Snare Drum Roll		*Piccolo 2' (Tibia)		
			*Maracas		Cathedral Chimes 25 tubes		
			*Castanets		*Glockenspiel 32 bars		
			*Tambourine		Solo to Gt 16'		
					Solo to Gt 8'		
			*Triangle		Solo to Gt 4'		
			*Woodblock				
			*Sleighbells				
TREMULANTS	SOLO	ACCESSORIES	Solo Expression Pedal (18 shades)	*TOY COUNTER PISTONS	*Steamboat Whistle		
	*Trumpet and Oboe Horn * Kinura (Independent) Tibia (operated by Vox Trem stopkey) MAIN Vox Humana (operates Tibia Trem) Tuba		Main Expression Pedal (14 shades) Crescendo Pedal (Great and Pedal stops) with 3 indicator lights* 5 Pistons per manual *Cancel piston per manual *General Cancel + GT to Ped Reversible Toe Stud *5 General Combination Toe Studs +Military Band Toe Stud (Operates Bass Drum, Snare Drum, Glockenspiel and Rhythm Cymbal) *Pistons set from recorder board switches in drawers under ACC. manual		*Nightingale *Woodblock *Triangle *Crash Cymbal (with Toe stud) *Tympani roll (with Toe Stud) * Snare Drum Roll		

\* は1986年に追加  
+は2006年に追加

(出所) American Theatre Organ Society, "Mitsukoshi Department Store - 3/12 Style R20 Wurlitzer,"  
http://www.atos.org/organ/all-japan/tokyo/mitsukoshi-department-store, 2014年11月24日最終閲覧

写真4 手鍵盤の左右に追加されたボタン

写真5 打楽器系の音を鳴らすための足で操作するボタン

## 2. オルガン設置の経緯

「登録審査資料」によれば、このオルガンは、1929（昭和4）年、欧米視察中の三越専務取締役・小田久太郎が、アメリカ・フィラデルフィアにあるジョンワナメーカー百貨店を訪れ、8階まで吹き抜けの店内に設置されている大仕掛けのシアターオルガンに感動し、日本橋三越本店にもシアターオルガンを備え付けたいと考え、その後、ニューヨークのウーリッツァー社ショールームで35,000ドルで購入したとされる。玉川裕子が「ワナメーカーのそれをそっくり模倣したものではないだろうか」〔玉川 1997: 36〕と推測しているが、概ね向首できるだろう。しかし、三越がオルガン設置に至るまでには、建築や音楽など、三越のイメージ戦略との関連で変遷があった。以下に経緯をまとめておく。

フィラデルフィアにあるジョンワナメーカー百貨店のオルガンは、1904（明治37）年のセントルイス万国博覧会のためにつくられたもので、その後ジョンワナメーカー百貨店に移され、1911（明治42）年6月22日に店内で初演奏された。当初から10,000本以上のパイプを有する大オルガンだったが、1911年から1917年にかけてパイプ8,000本が追加された。1924年から1930年にかけてさらに10,000本追加され、最終的なパイプ数は28,500本となった。6段の手鍵盤と足鍵盤、729のストップ、168のピストンボタン、42のフットコントロールを備える、総重量287トンの世界最大級のオルガンとして、現在も演奏されている<sup>(2)</sup>。

三越では、1914（大正3）年、地上6階、地下1階の鉄筋コンクリートの新館がつくられたが、建物の設計を担当した中村傳治（横河工務所）は、設計に際し、欧米の百貨店建築を視察し、それらを参考にして設計した〔初田 1993: 101-105〕。中村は建築学会でおこなった講演で、ジョンワナメーカー百貨店について次のように話している。

先づ中に這入りますと古い建物の方のことは最前世紀のものであるから申しませぬ。新しい



建物だけに付いて申しますと非常に天井が高い。高さは大抵二十三四尺もあります。殊に此真中に一つの大きな八階まで打抜いた所の明り取りの間がありまして上は例のステインドグラスから明りを探りまして其の四方の柱は淡いクリーム色のテラコッタで以て種々の模様の付いた装飾を施してあります。非常な壯嚴なものであります。第一階は紳士用の装飾品を重に賣捌き八階以上は大抵倉庫とか又は其中で賣ります物の修繕、製作をする工場、さういふものを以て満足されて居る。二階に上がりますには立派な装飾鐵製階段の外十八のエレベーターがあります。

此の二階に参りますとこれが二階の平面であります（第七圖）他に類の無いと申すは、ここに一つの奏樂堂がございまして、此の奏樂堂は四階まで打抜いてありまして、非常に立派なもので、奏樂堂だけ他へ持つて行つても奏樂堂として成立つ位の中々立派なものであります。この寫眞がさうであります。矢張り棧敷もありますしボックスもありますし、この正面に非常に大きなオルガンがありまして毎日一日に二回づつ此處でオルガンを弾いて人に聽かせると云ふ非常な大仕掛なものであります。それからして此の二階の他の場所はピアノとかオルガンとかさう云ふ楽器の陳列場になつて居りまして、他に小さい部屋が澤山ありまして、それ等は是等のオルガンなどを買取ります時に試験して鳴らして見ると云ふ様な極く小さい室が其處にあります [中村 1908: 29]。

中村が欧米の百貨店をモデルとして設計した三越新館には、中央部に幅約 12 メートル、奥行き約 18 メートルの大階段を配した大ホールが作られ、そのホールは 1 階から 5 階までの吹き抜けで、天井にはトップライト が設けられ、ステンドグラスを通して光が下まで落ちてくるようになっていた [初田 1993: 101-102]。そこにはオルガンはなかったが、新館が建設された大正前半期は、三越が少年音楽隊に最も力を入れていた時期であり、三越店内の中庭等で、売り出しの時や土日曜日に少年音楽隊が音楽を供していた [三枝 2004: 20-21]。

初田 [1993: 191] によれば、三越本店はその後、関東大震災の被害により、基礎部分と鉄骨の柱を残し、それらを利用して修築工事がなされた。1 階から 5 階までの吹き抜けホールをつぶして床を貼り、また、それまで建物の一部分にしかなかった 6, 7 階を法規の範囲内で最大限に増築して床面積を増大させたという。

この工事は 1927（昭和 2）年に完了した [初田 1993: 191]。三越にオルガンが最初に設置されたのは、この修築工事終了後の 1930（昭和 5）年であり、増築された 7 階のギャラリー（図 1）に設置された。

その後三越は、1935（昭和 10）年、それ以前から確保していた南側敷地に増築をおこない、建物内部も大きく変更された。中央部に 1 階から 6 階までの吹き抜けをもつ中央ホール、ステンドグラスを通して光が落ちてくるトップライトなど、一度無くなった吹き抜けホールが復活した [初田 1993: 191]。吹き抜けホールの大階段 2 階にはバルコニーが設けられ、

図 1 「昭和2年4月店内御案内」より7階の平面図  
[大三越歴史寫眞帖刊行會 1932: 83]

1935（昭和10）年にオルガンが設置された（図2）。

三越では震災後の建物改修に際し、1924（大正13）年、三越の林幸平と横河工務所の中村傳治とをアメリカに派遣した。7月9日に横浜を出発したふたりは、アメリカ到着後、シカゴ、クリブランド、ニューヨーク、ボストン、フィラデルフィアで調査をし、帰国する船のなかで三越修築プランを作成して、9月28日に帰国した〔林1932:189-240〕。吹き抜けホールをつぶして床面積の確保を優先するプランから、ふたたび、豪華な吹き抜け

図2 1935(昭和10)年の1階平面図  
〔株式会社三越 1990:298〕

ホールが復活していることは、床面積の確保と建物の豪華さとの間で、三越の考え方が揺れ動いていたことを示しているという指摘がなされている〔初田1993:191-192〕。

三越のイメージ演出の役割を担っていた少年音楽隊が解散するのは、震災後の1925（大正14）年で、建物の改修の時期と重なっている。少年音楽隊解散の理由について、『三越』は、「三越は芸術の園ではございません。芸術の園ならずして芸術の美果を得んとするは、其实無理な注文で、到底其目的を達することは出来ないのみか、寧ろ僭越の謗を免れないと存じます」〔三越1925:14〕と記し、商業組織が芸術に関わることが出すぎたことであるという認識を示している。しかし三越は、その後、オルガンを設置して新たな音楽活動を展開することになる。この時期の三越が、商品売るための床面積の確保と建物の豪華さとの間で揺れていたように、三越のイメージ戦略における音楽の役割にも揺れ動きがあったことが推測される。具体的な検証は今後の課題としたい。

### 3. オルガンの演奏

#### 3-1. 1930（昭和5）年の設置時

前述のとおり、1930（昭和5）年5月、7階ギャラリーにオルガンが設置された（写真6）。『三越』においても、「米国から最新式のパイプオルガンを購入して、七階ギャラリーに据付けました」「日本でも斯様に大きい新式のパイプオルガンは他にありません。先日より此の新楽器による独特の奏楽によって、ご来店の皆様をお慰め申上げてゐます」と、新しいオルガンを宣伝している（写真7）。

7階ギャラリーのオルガンによる演奏が最初に公開されたのは、1930（昭和5）年5月28、29の両日であったことが、読売新聞の広告からわかる（写真8）。

最初の演奏が、演奏者によるものか、この楽器の特徴である自動演奏装置によるものであるのか不明だが、翌月6月9日には、木岡英三郎（1895-1982）による本オルガンの演奏がJOAK（現在のNHK）ラジオによって中継された<sup>(3)</sup>。木岡は、アメリカ、フランスを中心に研鑽を積み、6年間の留学を経て1926（昭和元）年に帰国し、当時の日本を代表するオルガニストとして活躍していた人物である<sup>(4)</sup>。

この中継について『読売新聞』は、「大管絃樂に匹敵するパイプオルガン 映畫劇場に君臨する『樂器の王』——午後八時三越より中継——」というタイトルで、オルガンの説明とプログラムを紹介している<sup>(5)</sup>〔『読売新聞』1930年6月9日朝刊4頁〕。



**写真6 オルガンのコンソール**

[大三越歴史写真帖刊行会 1932: 86]

**写真7 1930(昭和5)年、7階ギャラリー  
に備えら付けられたオルガンの宣伝**

[三越 1930: 21]

**写真8 オルガン初演奏の  
広告**

[『読売新聞』  
1930年5月28日朝刊4頁]

この時の曲目は、木岡による独奏で、「トツカタと遁走曲 ニ短調 バッハ作曲」, 「聖母讃唱 アルカデルト作曲 / リスト編曲」, 「田園曲 フランク作曲」, 「オルガン交響（響か、引用者注）曲 第八番終曲 ヴィドール作曲」, さらに自動装置による演奏で「ミネトンカの湖畔にて リューレス作曲」, 「夢に見る美はしの島 フェアリス作曲」となっている [『読売新聞』1930年6月9日朝刊4頁]。バッハのトッカータとフーガニ短調や、フランクのパストラーレ、ヴィドールのオルガン交響曲第8番のフィナーレなど、ドイツとフランスの本格的なオルガン音楽のほか、本オルガンの特色のひとつである自動演奏装置による演奏も含まれているなど、新しく設置されたオルガンの性能を最大限伝えることが考慮されたプログラムとなっている。ただ、同新聞のラジオ時間表の欄 [『読売新聞』1930年6月9日朝刊4頁]を確認すると、8時からパイプオルガン、8時30分からは長唄とあり、中継は30分であったことから、プログラムのすべてを放送するのは難しかったのではないかと推測される。

また、同年秋には、連続10回の「大パイプオルガン演奏会」シリーズ「全オルガン楽代表的傑作演奏」が企画され、第1回目は11月16日（土）の夜7時から、木岡による演奏で、「大バッハ代表的名作演奏の夕」としてオールバッハプログラムによる演奏会がおこなわれたことが、森田真理子が紹介している演奏会プログラム（木岡英三郎・梅子記念資料室蔵）からわかる [森田 2010: 20]。演奏されたのは、前半に「大前奏曲とフーガ（聖アンナ）変ホ長調」「コラール前奏曲 吾が魂はしたふ・喜べ愛する信の友よ」「トカタとフーガ ニ短調」「オルガンソナタ 第四番（全楽章）ニ短調」「大バッサカリヤとフーガ ハ短調」で、休憩をはさみ、後半に「前奏曲とフーガ イ短調」「コラール前奏曲 主よ、吾をあはれめ・神は高きやぐら、吾が強き盾ぞ」「小フーゲ ト短調」「幻想曲 ハ長調」「大幻想曲とフーガ ト短調」という、大曲を数多く配する意欲的な構成になっている。チケットは「金壹圓及貳圓」とある。

このプログラムによれば、第2回目以降、(2) フランク、(3) クリスマス、(4) メンデルスゾーン、

(5) ワグナー・グリーク等の曲のオルガン編曲, (6) ギルマン, (7) ヴィドール, (8) リスト・レーガー・ブラームス, (9) バッハ以前, (10) ウェーバー・サンサーンス・チャイコフスキー等の曲のオルガン編曲, と続いており, ドイツ・フランスの本格的なオルガン音楽特集, 季節行事にあわせた音楽特集, オーケストラ曲のオルガン編曲特集など, 非常に多彩な内容をもつ企画であったことがわかる。

また, 1931(昭和6)年5月30日(土)には, 木岡による演奏で, 「大パイプオルガン演奏会」シリーズとして「近代オルガン交響曲の夕」が開催されたことが, 演奏会プログラム(木岡英三郎・梅子記念資料室蔵)から確認できる<sup>(6)</sup>。それによれば, 演奏されたのは, バッハ作曲「大前奏曲とフーガ」ニ長調, ギルマン作曲「交響曲(オルガン用)」第1番作品42, フランク作曲「大交響曲(オルガン用)」作品17, ヴィドール作曲「交響曲(オルガン用)」6番(1, 2楽章), 第4番(3, 4楽章), 5番(終曲)で, 木岡がフランス留学中に学んだ交響乐的なオルガン音楽の魅力に満ちた構成になっている。

### 3-2. 1935(昭和10)年

先述のとおり, 1935(昭和10)年には吹き抜けをもつ中央ホールが復活し, オルガンは2階バルコニーに設置された。写真9はそのおりの新聞広告であるが, これによると, オルガンは午前10時30分, 11時30分, 午後1時30分, 3時の4回演奏されたことがわかる。オルガニストによるのか, 自動演奏装置によるのか, その両方によるのかは不明である。

同年12月25日の新聞のラジオ欄は, 木岡英三郎による本オルガンの演奏中継があることを伝えている。プログラムは「トツカータとフーガニ短調(バッハ作曲)」, 「きよしこのよる(ドイツ民謡)」, 「シシリーのクリスマス(ヨン作曲)」, 「ゴシックメヌエット(ベールマン作曲)」, 「白鳥(サンサーンス作曲)」, 「グランドフィナーレ(ヴィドール作曲)」となっている[『朝日新聞』1935年12月25日朝刊7頁, 『読売新聞』同日朝刊15頁]。

翌年以降も, 三越の新聞広告や, 新聞のラジオ番組紹介頁には, オルガニストによる演奏や自動演奏装置による演奏の記事が散見される。

1936(昭和11)年3月20日には, 「春の夜の團欒に贈る『子供と家庭の夕』」として, 夜7時30分から, 三越オルガンの自動演奏の中継, 続いてラジオドラマ, 次に童曲の放送が特集されており, 本オルガンの自動演奏では「春のこだま」「ハンガリア舞曲第五番」「お人形の結婚式」「星条旗よ永久なれ」「圓舞曲メリーウイドウ」の5曲が演奏されたようである[『朝日新聞』1936年3月20日朝刊6頁]。

同年7月19日には, 子供向け番組として, 木岡によるオルガン演奏と解説を交えた番組が放送されている[「パイプオルガンのお話 後六時の少年音楽講座」『朝日新聞』1936年7月19日朝刊7頁]。

写真9 三越増築完成の新聞広告  
[『朝日新聞』1935年10月5日朝刊6頁]

同12月25日には, 木岡による演奏が中継され, 「アリオソ(バッ

ハ作曲)」、「フーガ 変ホ長調(バッハ作曲)」、「クリスマス・カロール」、「前奏曲(サンサーンス作曲)」、「スケルツァンド(ピエルネ作曲)」が演奏されている『朝日新聞』1936年12月25日朝刊14頁]。

翌年以降には、木岡と、それ以外のオルガニストの名前が三越の新聞広告やラジオ番組紹介頁に見られるようになる。

『読売新聞』[1936(昭和11)年3月31日朝刊4頁]に掲載された三越の広告では、「四月一日より三十日まで 毎日二回(午前十一時 午後一時半) 三越のパイプオルガン 泰西名曲演奏 木岡英三郎氏 松本幹氏 赤間尚義氏 上記の諸先生交る交る出演」とある。

また、翌1937(昭和12)年3月には、「十六日より卅一日まで 大中寅二氏 松浦千恵子嬢 杉井幸一氏 隔日交代演奏」とある[『読売新聞』1937(昭和12)年3月15日朝刊1頁]。「やしの実」の作曲者であり、50年以上にわたって東京の霊南坂教会のオルガニストを務めた大中寅二(1896-1982)や、民謡のジャズアレンジで知られる杉井幸一(1906-1942)など、多彩な音楽家を出演者として招き、一般客の耳を楽しませたものと推測される。

同年7月29日には、木岡の三越オルガン演奏中継として、「小遁走曲ト短調(バッハ作曲)」、「ラルゴ(ヘンデル作曲)」、「春のこだま(フリムル作曲)」、「ゴシック・メヌエット(ベールマン作曲)」、「アヴェ・マリア(アルカデルト作曲 リスト編曲)」、「妖精のワルツ(ベルリオース作曲)」、「ボレロ(モシエコフスキー作曲)」というプログラムが見られる[『朝日新聞』1937年7月29日朝刊7頁]。

翌1938(昭和13)年には、木岡英三郎に師事してオルガンを学んだ奥田耕天(1908-2001)による三越オルガン独奏のラジオ中継があり、「パッサカリヤ ハ短調」(バッハ曲)、「アヴェ・マリア」(アルカデルト原曲 リスト曲)、「ガヴオット」(マルティーニ曲)という曲目が掲載されている[『朝日新聞』1938年11月15日朝刊9頁]。

三越のオルガン演奏のプログラムについては、今後さらに詳細な調査をおこなう必要があるが、現時点で言えるのは、三越のオルガンは、オルガン研究者である赤井励が「筆者の父などは当時、三越デパートでラヴェルの『ボレロ』をパイプオルガンで聞いたことがあるというが、その演奏者は木岡英三郎その人だったという」[赤井1995:239]と述べているように、当時の日本でもっとも優れたオルガニストのひとりである木岡の演奏を百貨店やラジオで聴くことができるという、稀有な機会を一般の人々に提供していたということである。また、本格的なオルガン音楽だけでなく、オーケストラ曲の編曲ものや、子供向けの曲、ジャズアレンジの音楽まで、多彩なプログラムが提供されていたとみられ、幅広いジャンルの音楽に対応できるシアターオルガンの性能が発揮されていたと推測される。

### 3-3. 自動演奏用のロール楽譜

すでに述べたように、三越のオルガンには自動演奏の装置が付いており、それによる演奏が店内で、またラジオで流れていた。

「登録審査資料」に付属の参考資料には、オルガンの右側に、白い楽譜のロールがセットされた自動演奏装置が写った写真がある(写真10)。本オルガンが中央区民有形文化財に登録された2008(平成20)年に本オルガンを見学したアレンジャーの高山博のコラムに掲載されている写真にも、白いロールがセットされている様子が写っており、「紙のロールにパンチ穴が開いていて、これを読み

---

取ることによって演奏する仕組み」と解説している<sup>(7)</sup>。

2014年現在、オルガンの右側にこの装置はあるものの、楽譜のロールはセットされていない。三越によれば、ロールは現在まったく残っておらず、今の自動演奏装置はオルガンの修復時に設置されたもので、戦前にあった装置ではないというが、詳細は不明であるという。「登録申請資料」でも、ロールについてはまったく言及されていない。

1985（昭和60）年から1986（昭和61）年にかけて三越のオルガン修復に携わり、その後、20年間にわたって、このオルガンのオルガニストでもあったビクター・クラーク・セアル<sup>(8)</sup>の報告によれば、もともとは、1台の自動演奏装置と50のロールがあったという。同報告によれば、1980年代の修復時、オリジナル自動演奏装置はまだ接続されていたが、ロールは戦争ですべて焼失しており、セアルはウーリッツァー社製のバンドオルガン（自動式オルガン）165を使って新しい自動演奏装置を作ったという<sup>(9)</sup>。

#### 写真10 自動演奏装置

（「登録審査資料」より）

1939（昭和14）年2月27日の『読売新聞』は、三越の従業員の邊見利雄が国産の「和曲ロール」の製作に成功し、それまで輸入の「洋楽ロール」の演奏ばかりだったところに、「日本曲のかずかずが朗らかに奏でられる」と報じている〔『読売新聞』1939年2月27日朝刊7頁〕。輸入のオリジナルロールに加えて、三越で作られた邦楽曲のオリジナルロールもまた、戦争で失われてしまったものと考えられる。

2014年現在、戦前のロールも、また、1985年の修復以降に使用されたロールも、所在不明である。

## 4. 戦後のオルガン

第1節で述べたように、「登録審査資料」によれば、戦後、進駐軍のオルガン愛好家バーノン・ブラウンの尽力により、元ウーリッツァー社の技術者の指導のもとで修復され、1946（昭和21）年に演奏が再開されたという。

ただ、これより早い1945（昭和20）年11月12日に、日本橋三越で開催された宝くじの抽籤がオルガン伴奏によっておこなわれたという新聞記事がある。5,000人ほどの人びとが集まり、「一、二階ホールはもちろん入口まで溢れてはち切れさうな」様子のなか、「パイプオルガンの旋律に乗って抽籤」がおこなわれたという〔「寶籤初の大當り パイプオルガンの伴奏で抽籤」『読売新聞』1945年11月13日朝刊2頁〕。オルガンは修復が必要な状態であったとはいえ、残された機能でイベントを盛り上げることに貢献していたことがわかる。

「登録申請資料」によれば、1951（昭和26）年、三越のオルガンの専属奏者として松沢宏が入社し、同じ年に開局したラジオ東京（現在のTBSラジオ）で歌のゲストを招いてデビュー演奏をおこなったという。

松沢については三越には資料がないそうで詳細は不明だが、『読売新聞』によれば、「小学校の音楽教師のあと、日劇ダンシングチームの歌唱指導をしていた」ところ、「初代の定期奏者にスカウトされ」、「パイプオルガンははじめてだった」ということで「外国からレコードや譜面を取り寄せては独学でマスターした」という〔「ぶらり紀行」『読売新聞』1977年10月9日朝刊26頁〕。

ラジオ東京の放送開始は1951（昭和26）年12月24日（月）で、翌25日（火）の番組に、三越のオルガンの演奏を含むプログラムが見えている。午後7時20分から7時30分までの「三越玉手箱（三越提供）」という番組で、「歌うパイプオルガン」として「一、サンタクロースがやって来た」「二、アヴェ・マリア シューベルト作曲」「三、ホワイト・クリスマス アービング・バーリン作曲」の3曲が、「パイプオルガン 松沢宏」「歌 真田千鶴子」によって演奏・放送された。<sup>(10)</sup>

松沢による三越での日常的なオルガン演奏のようすについても、三越には資料が残っていないそうである。先述の『読売新聞』[「ぶらり紀行」『読売新聞』1977年10月9日朝刊26頁]によれば、以下のとおりである。

午前十時。ベルが鳴った。

同時に、松沢さんの右手第五指が鍵盤（けんばん）を押した。この二十六年間、この時刻に、いつもきまって鳴る音だ。〈中央ファ〉の一オクターブ上の〈ファ〉音。

〈お江戸日本橋〉のメロディーが、前奏に続いてりょうりょうと鳴り渡った。

（中略）

民間放送ができると、三越はこの曲をCMのテーマソングにした。同時に、開店の伴奏に使うことにした。

ラジオ東京の開設直後より、午後7時20分から10分間、月曜日「三越文学サロン（三越）」、火・木曜日「唄うパイプオルガン（三越）」、水・金曜日「夢声百貨店（三越）」、土曜日「三越劇場（三越）」（土曜日のみ45分まで）という番組が組まれており、<sup>(11)</sup>この番組との関連で〈お江戸日本橋〉が三越の宣伝用に使用され、松沢は開店時の音楽として採用したようである。

2014年現在、三越では開店時、店内放送で音楽を流しており、〈お江戸日本橋〉は使用されていない。金曜日・土曜日・日曜日は、開店後15分くらいからオルガニストによるオルガン独奏があり、12時と15時にも演奏がおこなわれているが、三越によると、〈お江戸日本橋〉を演奏するという決まりはなく、江戸関連の催事があるときなどにオルガニストの判断で演奏されることもあるという。

推測になるが、松沢が定年を迎えた1985（昭和60）年までは開店時における〈お江戸日本橋〉の演奏がおこなわれていたかもしれない。松沢の定年後、既述のとおり、三越のオルガンは大きな修復がなされるが、その修復に携わったセアルがその後オルガニストを務めるようになり、松沢の時代の演奏習慣が変化していったのではなかろうか。

## 終わりに

以上、断片的な資料によってではあるが、三越オルガンの歴史について、大まかな全体像をもつことができた。三越のオルガンを通じた音楽活動は、木岡によって本格的なオルガン音楽が提供されていた設置から終戦までの期間、松沢宏が専属オルガニストを務め、〈お江戸日本橋〉をイメージソングとして使用したり、ライトな音楽を中心に提供したりしていた1951（昭和26）年から1985（昭和60）年までの期間、そして、セアル等によって大規模な修復がなされたそれ以降の期間に分けて整理していくことが妥当であろう。三越において本オルガンが担った役割は、それぞれの時期



において異なっていたと考えられるが、それについての考察は、本オルガンに関する資料の補充調査や三越のほかの活動との照らし合わせなどを経て、稿を改めてまとめることとしたい。

## 謝辞

三越のオルガン調査に際し、株式会社三越伊勢丹ホールディングス業務本部 総務部 コーポレートコミュニケーション担当の森正弘氏、山田秀樹氏、現在三越でオルガニストを務めておられる高橋美香子氏に、また、木岡英三郎関係の資料調査に際し、木岡完造氏に便宜をはかっていただきました。心からお礼申し上げます。

## 註

(1)——American Theatre Organ Society, “Mitsukoshi Department Store - 3/12 Style R20 Wurlitzer,” <http://www.atos.org/organ/all-japan/tokyo/mitsukoshi-department-store>, 2014年11月24日最終閲覧。

なお、「登録審査資料」の記述とセアルの報告の間には、オルガンの設置年、パイプの本数等に違いが見られるほか、セアルの報告にあるストップで、現在のオルガンには見られないものもあるなどの問題があるため、今後精査していきたい。

(2)——ジョンワナメーカー百貨店のオルガンについては以下を参照。Friends of the Wanamaker Organ at Macy's, Philadelphia, “Facts and Figures About the Wanamaker Organ,” <http://www.wanamakerorgan.com/about.php>, 2014年11月24日最終閲覧。

(3)——「登録申請資料」によると、「昭和十一年（一九三六）からは、JOAK（現在のNHK）のラジオ放送で、本資料の演奏が全国放送されて、各地から大きな反響が寄せられたという」とあるが、JOAKによるオルガン演奏の中継は、オルガン設置の1930（昭和5）年から開始されたことが、本稿のとおり、当時の新聞などから明らかである。

(4)——木岡英三郎については森田真理子による研究〔森田2010〕を参照。

(5)——「パイプオルガンは『楽器の王』と云はるる巨大なもので音色の變化から云つても音量の強大な事から云つても優に大管絃樂と匹敵する。是はヨーロッパに於いて古来キリスト教會にだけ用ひられて居たので特に莊嚴な音樂に適する様に作られたものであるが最近十餘年間にアメリカで映画劇場用として用ひられる様になつたので急速な發達を遂げるに至つた。歐米の大教會堂や演奏會場に設備してあるのは廣大なスペースを要するもので日本には其の稍小形なものが東京音樂學校、ドイツ普

及教會、立教大學等に設備してある。しかし是等は皆教會用のものであるから一般大衆向の音樂を奏する事は出来ない。今回三越に備へつけられたものは最新式の劇場用オルガンで如何なる曲の演奏にも適し日本には始めての型である。これは八万圓の巨費を要したもので通常の演奏者に依る演奏も出来るしまた自動装置に依つて機械的に演奏する事も出来る。全設備は数十坪のスペースを占め電氣に依つてすべての操作が行はれる様になつてゐて一千本以上の發聲管から各種多様な音色を生む仕掛である。製造所はワーリッツァー會社で最新最善の機會設備及び電氣裝置を有するために目下のところ日本に此の新式なオルガンが弾ける人は木岡榮三郎氏（アメリカのエール大學音樂科卒業現に東京音樂學校教師）ひとりしかいない。それほど珍しい且つ優れた樂器なのである」〔『読売新聞』1930年6月9日朝刊4頁〕。

(6)——三越で開催された木岡の「大パイプオルガン演奏會」のうち、2014年現在まででプログラムの所在が確認できたのは1930（昭和5）年11月16日（土）と1931（昭和6）年5月30日（土）の演奏会のみで、いずれも木岡英三郎・梅子記念資料室に所蔵されている。

(7)——Rock On「高山博さんによるコラム『東京音楽散歩』：第二回 日本橋三越のシアターオルガン」<http://www.miroc.co.jp/magazine/archives/3653>, 2014年11月24日最終閲覧。

(8)——注1参照。

(9)——セアルによる別の報告によれば、彼がオルガンの近くの古いクローゼットを掃除していたら、1930年の失われた自動演奏装置用のロールが二つ見つかったという。一つは完全な状態で、もう一つは最初のところに破れがあり、紙は黄色く変色していたという。退職した昔のオルガニストメンバーは、もともと200ロールがあったが、1944年の東京の空襲です

べて消滅した、と語ったという (Mechanical Music Digest™ Archives, “Mitsukoshi Wurlitzer Organ Player & Rolls,” <http://www.mmdigest.com/Archives/Digests/200608/2006.08.27.04.html>, 2014 年 11 月 24 日最終閲覧)。ロールの数などに違いが見られるが、200 という数は、その後に日本で作られたロールも含むのかもしれない。今後さらに調査したい。

(10)——ラジオ東京スピリッツ「1951 年 12 月 25 日開局

当日の番組表」<http://www.tbs.co.jp/radio/radiotokyo/img/19511225.pdf>, 5 頁, 2014 年 11 月 24 日最終閲覧。

(11)——radioFly「ラジオ東京開局直後の番組表」<http://radiofly.to/wiki/?%A5%E9%A5%B8%A5%AA%C5%EC%B5%FE%B3%AB%B6%C9%C4%BE%B8%E5%A4%CE%C8%D6%C1%C8%C9%BD>, 2014 年 11 月 24 日最終閲覧。

## 参考文献

赤井励, 1995,『オルガンの文化史』, 青弓社。

株式会社三越, 1990,『株式会社三越 85年の記録』, 株式会社三越。

三枝まり, 2004,「日本の交響楽運動の黎明期—三越少年音楽隊と中心として—」,『音楽学』50 (1), 13-26, 日本音楽学会。  
大三越歴史寫真帖刊行會, 1932,『大三越歴史寫真帖』。

玉川裕子, 1997,「三越百貨店と音楽—音楽と商業は手に手をとって—」,『桐朋学園大学研究紀要』23, 27-59。

玉川裕子, 2007,「西洋・日本・アジア: 三越百貨店の音楽活動にみる音楽文化の西洋化と国民意識の形成」,『ドイツ文学: Neue Beiträge zur Germanistik』132, 78-98, 日本独文学会。

多米忠, 1932,『パイプオルガンに就て』(吉田實, 志村拓生, 高橋秀, 馬淵久夫編, 1992,『日本のオルガン II』, 日本オルガニスト協会に再録)。

中村傳治, 1908,「歐米における『デパートメントストア』」,『建築雑誌』256, 建築学会, 23-33。

初田亨, 1993,『百貨店の誕生』, 三省堂。

林幸平, 1932,『続予を繞る人々』, 百貨店商報社。

三越, 1925,『三越』15 (6)。

三越, 1930,『三越』20 (6)。

森田真理子, 2010,「木岡英三郎—日本におけるオルガン開拓者—その伝記と揺るぎない遺産—」,『オルガン研究』38, 1-37, 日本オルガン研究会。

吉田實, 秋元道雄, 奥田耕夫, 志村拓生, 馬淵久夫, 望月広幸編, 1985,『日本のオルガン』, 日本オルガニスト協会。

吉田實, 志村拓生, 高橋秀, 馬淵久夫編, 1992,『日本のオルガン』II, 日本オルガニスト協会。

Meusy, Jean-Jacques,《Lorsque l'orgue s'invita au cinéma》, 1895.Mille huit cent quatre-vingt-quinze [En ligne], 38.

## Web

ラジオ東京スピリッツ「1951 年 12 月 25 日開局当日の番組表」

<http://www.tbs.co.jp/radio/radiotokyo/img/19511225.pdf>, 5 頁, 2014 年 11 月 24 日最終閲覧。

American Theatre Organ Society, “Mitsukoshi Department Store - 3/12 Style R20 Wurlitzer,”

<http://www.atos.org/organ/all-japan/tokyo/mitsukoshi-department-store>, 2014 年 11 月 24 日最終閲覧。

Friends of the Wanamaker Organ at Macy's, Philadelphia, “Facts and Figures About the Wanamaker Organ,”

<http://www.wanamakerorgan.com/about.php>, 2014 年 11 月 24 日最終閲覧。

Rock On「高山博さんによるコラム『東京音楽散歩』: 第二回 日本橋三越のシアターオルガン」<http://www.miroc.co.jp/magazine/archives/3653>, 2014 年 11 月 24 日最終閲覧。

Mechanical Music Digest™ Archives, “Mitsukoshi Wurlitzer Organ Player & Rolls”, <http://www.mmdigest.com/Archives/Digests/200608/2006.08.27.04.html>, 2014 年 11 月 24 日最終閲覧。

radioFly「ラジオ東京開局直後の番組表」<http://radiofly.to/wiki/?%A5%E9%A5%B8%A5%AA%C5%EC%B5%FE%B3%AB%B6%C9%C4%BE%B8%E5%A4%CE%C8%D6%C1%C8%C9%BD>, 2014 年 11 月 24 日最終閲覧。

(国立歴史民俗博物館研究部)

(2014年12月1日受付, 2015年3月19日審査終了)